

学 位 論 文 要 旨

氏 名 李 瀟

題 目 主体的な学びを構築する書法教育の研究
- 中国における授業実践の考察を中心に -

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は、中国における書法教育の歴史的・制度的枠組を踏まえつつ、学習者の主体的な学びを促す授業の在り方を検討することを目的とするものである。従来、技能訓練に偏りがちであった学校教育の書法授業を、文化理解と自己表現を重視する学習として捉え直すことを目指し、歴史的・制度的分析と学校における授業実践研究を往還させながら、授業モデルの構成とその有効性を明らかにした。

第1章では、中国の書法教育と日本の書写・書道教育の歴史的展開を整理し、中国において書法が古代には人格修養や文化理解の役割を担い、近代以降は実用的写字および民族文化継承を中心とする教育へと位置づけが変化してきたことを示した。日本については、近世以降の制度化と戦後の教科編成の変遷を概観し、両国の制度形成と教育理念の推移を比較の観点から整理することで、現行の書法教育を理解するための歴史的基盤を提示した。

第2章では、中国の教育課程・教材・教員養成制度を分析し、教材内容の質的不統一や書法教員の専門性不足、評価観の画一性などが、学習者の意見表明や自己表現を困難にしている構造的要因であることを明らかにした。その上で、自由な対話と多元的評価を支える学習環境の構築が必要であることを示した。

第3章から第5章では、中国の学校教育現場および関連施設において三つの授業実践を行い、文化・鑑賞の内容を導入しつつ、自由な発言機会と協働的な意味形成・相互評価を重視する授業モデルの構成と検証を行った。第3章では、地域の木版印刷文化を教材とし、教室内で文化・鑑賞の内容を導入した制作活動を構成した。技能習得を唯一の目標とせず、自由な発言機会と多元的な評価を保障したうえで、グループによる協働を通して、材料理解・工程の意味づけ・意図の言語化がどのように成立するかを相互行為分析と作品分析から記述し、教室内で協働的な意味形成と意見表出の場を重視する授業モデルの基本構成を示した。

第4章では、このモデルを博物館という教室外の文化的環境に適用し、実物資料の観察、観点共有の対話、書写材料や書体変遷に関する解釈の言語化、展示・振り返りの各場面を検討した。その結果、教室で育まれた発言の安心感が博物館という開かれた場においても維持・発展し、自己

の見方の確認や他者理解の進展、自己肯定感の高まりが感想記述および質問紙から把握された。本章は、学習環境という外在的条件に着目してモデルの有効性を確かめた検証段階として位置づけられる。

第5章では、既習の唐詩を教材とする従来型の教室場面に、第3章・第4章で構成した授業モデルを適用した。書体の観察、臨書、話し合い、共同制作、振り返りを往還する学習過程を設計し、児童が文字の視覚的・構造的特徴に基づいて「どの字を」「どのように」書くかを考え、仲間との対話を通して自らの書き方を調整していく姿を、アンケート記述・相互行為記録・作品比較から分析した。その際、観察語彙を用いた「めあて」の設定や、作品に対する自己評価・相互評価を通して、単なる手本の再現にとどまらない表現選択の過程が形成されることを示した。また、アンケート記述にもとづき学習段階をA・B・Cの三段階に整理し、代表児童の行為分析を行うことで、同じ学習環境のもとでも構造理解と表現意識の結びつき方に幅があること、探究的な学びを継続的に支える必要性があることを明らかにした。

本研究の成果として、歴史・制度レベルの分析と、具体的な授業場面における相互行為分析・作品分析・質問紙調査を統合し、技能中心の書法教育を、文化理解と自己表現を重視する学びとして捉え直すための具体的枠組を示した点が挙げられる。さらに、教室内・博物館・古典詩文を用いた従来型授業とは異なる学習環境に上記の授業理念を適用し、その条件と効果を段階的に検証したこと、また文化的・鑑賞的素材、多面的な評価観、心理的安全性と発言の安心感といった要素を相互に関連づけ、中国と日本に共通する技能偏重の課題を乗り越える手がかりとして位置づけた点が、本研究の新規性であると考えられる。

以上より、本研究は、中国における書法教育を、歴史的伝統と現代的課題の双方に応答しつつ、学習者が文化的文脈と身体的経験、対話的な学びを通して自己表現を形成する教育実践へと転換していくための理論的・実証的基盤を提示したものである。今後は、本研究で構成した授業モデルを多様な地域・学年・教員層に広げて検証し、カリキュラム開発および教員養成の改善へと接続していくことが課題である。